

## 第3章 史跡幡羅官衙遺跡群を取り巻く環境

### 3-1 深谷市と熊谷市の市勢

#### 3-1-1 市勢概要

平成 18 年（2006）1 月 1 日に、旧深谷市・岡部町・川本町・花園町の合併により誕生した新「深谷市」は、埼玉県北西部に位置し、東京都心から 70 km 圏にある。東は熊谷市に、西は本庄市と美里町、南は嵐山町と寄居町、北は群馬県の伊勢崎市及び太田市に接している。北部は利根川水系の低地、南部は秩父山地から流れ出た荒川が扇状台地を形成する平坦な地形となっており、利根川、荒川という関東を代表する河川や鐘撞堂山など、自然豊かな環境を有している。市域は南北に約 15 km、東西に約 13 km、面積は 138.37 km<sup>2</sup>である。



図 14 深谷市・熊谷市の位置

新「熊谷市」は、平成 17 年（2005）10 月 1 日に、旧熊谷市・妻沼町・大里町の合併により誕生した。平成 19 年（2007）2 月 13 日には江南町が編入され、埼玉県北部では初の 20 万人都市となった。東京都心から 50～70 km 圏に位置し、深谷市に東接し、東は行田市と鴻巣市、南は吉見町、東松山市、滑川町及び嵐山町、北は群馬県の太田市、大泉町及び千代田町に接している。地形はほぼ平坦で、荒川や利根川の水に恵まれた肥沃な大地と豊かな自然環境を有する。市域は南北に約 20 km、東西に約 14 km、面積は 159.82 km<sup>2</sup>である。埼玉県北部地区で最大の人口数を誇り、北部の経済の一大拠点であり、特例市（施行時特例市、中核市移行予定無し）・業務核都市（深谷市と一体指定）・景観行政団体・特定行政庁に指定されている。

#### 3-1-2 人口

令和 2 年 3 月現在、深谷市の人口は 143,180 人、世帯数は 60,226 世帯となっている。年齢別人口（平成 27 年度国勢調査）では、前回（平成 22 年度国勢調査）と比べて、年少人口（0 歳から 14 歳）が 0.86%減少、生産年齢人口（15 歳から 64 歳）は 3.86%減少し、65 歳以上の老年人口の構成比が 4.64%増加し、人口の高齢化が進んでいる。

令和 2 年 3 月現在、熊谷市の人口は 196,616 人、世帯数は 87,230 世帯で、埼玉県で 9 番目、埼玉県北部で最大の人口を誇る。年齢別人口（平成 27 年度熊谷市統計書）では、前回（平成 22 年）と比べて、年少人口（0 歳から 14 歳）が 0.73%減少、生産年齢人口（15 歳から 64 歳）は 3.5%減少し、65 歳以上の老年人口の構成比が 4.64%増加し、人口の高齢化が進んでいる。

表 6 年齢別人口統計調査

| 年齢区分    | 総数      | 男      | 女      | 構成比 (H27) | 構成比 (H22)) |
|---------|---------|--------|--------|-----------|------------|
| 0～14 歳  | 18,574  | 9,450  | 9,124  | 12.92%    | 13.78%     |
| 15～64 歳 | 87,536  | 44,923 | 42,613 | 60.87%    | 64.73%     |
| 65 歳以上  | 37,423  | 17,043 | 20,380 | 26.02%    | 21.38%     |
| 不 明     | 278     | 178    | 100    | 0.19%     | 0.11%      |
| 計       | 143,811 | 71,594 | 72,217 | 100.00%   | 100.00%    |

(出典：深谷市 統計・オープンデータ 国勢調査編 年齢別人口)

表 7 年齢別人口統計調査

| 年齢区分    | 総数      | 男       | 女       | 構成比 (H27) | 構成比 (H22)) |
|---------|---------|---------|---------|-----------|------------|
| 0～14 歳  | 24,792  | 12,764  | 12,028  | 12.30%    | 13.03%     |
| 15～64 歳 | 125,787 | 64,940  | 60,847  | 62.39%    | 65.89%     |
| 65 歳以上  | 51,033  | 22,831  | 28,202  | 25.31%    | 21.08%     |
| 計       | 201,612 | 100,535 | 101,077 | 100.00%   | 100.00%    |

(出典：平成 22 年度熊谷市統計書、平成 27 年度熊谷市統計書)

### 3-1-3 土地利用と景観

#### (1) 土地利用

深谷市の主な土地利用は、総面積（平成 29 年度）の 47.52%を田・畑が占め、次いで宅地が 23.59%となっている。平成 24 年度と比較すると田・畑が約 100.3ha 減少している。また、本市の市街化区域と市街化調整区域の比率は、16%と 84%である（平成 29 年度 4 月現在）。用途地域別の面積は、住居系の区域が最も多く、全体の 68%を占め、次いで工業系 26%、商業系が 6%である（深谷市 統計・オープンデータ 都市計画の概要 平成 29 年 4 月 1 日現在）。

熊谷市の主な土地利用は、総面積（平成 29 年度）の 39.74%を田・畑が占め、次いで宅地が 22.33%となっている。平成 24 年度と比較すると田・畑が約 93.8ha 減少している。また、本市の市街化区域と市街化調整区域の比率は、16.5%と 83.5%である。用途地域別の面積は、住居系の区域が最も多く、全体の 61%を占め、次いで工業系 29.6%、商業系が 9.4%である（熊谷市の都市計画 令和元年度）。

表 8 深谷市 地目別土地利用面積

| 地目      | 24年度     | 25年度     | 26年度     | 27年度     | 28年度     | 29年度     | 構成比（24年度） | 構成比（29年度） |
|---------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|
| 田       | 1,760.3  | 1,755.7  | 1,753.8  | 1,750.8  | 1,748.2  | 1,745.9  | 12.72%    | 12.62%    |
| 畑       | 4,914.7  | 4,890.4  | 4,874.7  | 4,857.3  | 4,842.4  | 4,828.8  | 35.51%    | 34.90%    |
| 宅地      | 3,175.7  | 3,196.2  | 3,211.5  | 3,230.5  | 3,246.9  | 3,263.9  | 22.94%    | 23.59%    |
| 池沼      | 3.8      | 3.7      | 3.8      | 3.8      | 3.7      | 3.7      | 0.03%     | 0.03%     |
| 山林      | 429.0    | 429.0    | 428.2    | 419.5    | 417.0    | 411.4    | 3.10%     | 2.97%     |
| 原野      | 37.7     | 37.8     | 37.9     | 37.9     | 38.0     | 38.0     | 0.27%     | 0.27%     |
| 雑種地     | 638.6    | 639.6    | 641.6    | 652.5    | 656.2    | 662.0    | 4.61%     | 4.78%     |
| その他     | 2,881.3  | 2,887.4  | 2,889.5  | 2,884.7  | 2,884.6  | 2,883.3  | 20.82%    | 20.84%    |
| 総面積（ha） | 13,841.1 | 13,839.8 | 13,841.0 | 13,837.0 | 13,837.0 | 13,837.0 | 100.00%   | 100.00%   |

（出典：深谷市 統計・オープンデータ 都市計画の概要 平成 29 年 4 月 1 日）

表 9 熊谷市 地目別土地利用面積

| 地目      | 24年度     | 25年度     | 26年度     | 27年度     | 28年度     | 29年度     | 構成比（24年度） | 構成比（29年度） |
|---------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|
| 田       | 3,818.6  | 3,809.1  | 3,795.9  | 3,784.0  | 3,784.0  | 3,776.5  | 23.88%    | 23.62%    |
| 畑       | 2,628.0  | 2,618.1  | 2,601.9  | 2,590.2  | 2,590.2  | 2,576.3  | 16.44%    | 16.11%    |
| 宅地      | 3,485.8  | 3,504.4  | 3,534.9  | 3,552.1  | 3,552.1  | 3,570.6  | 21.80%    | 22.33%    |
| 池沼      | 30.6     | 30.5     | 30.3     | 30.8     | 30.8     | 30.7     | 0.19%     | 0.19%     |
| 山林      | 495.2    | 494.4    | 492.0    | 489.8    | 489.8    | 482.5    | 3.10%     | 3.02%     |
| 原野      | 38.5     | 38.5     | 37.2     | 37.2     | 37.2     | 36.9     | 0.24%     | 0.23%     |
| 雑種地     | 1,166.3  | 1,168.8  | 880.1    | 1,166.3  | 1,166.3  | 1,175.4  | 7.29%     | 7.35%     |
| その他     | 4,325.0  | 4,324.0  | 4,615.7  | 4,337.6  | 4,331.6  | 4,339.1  | 27.05%    | 27.14%    |
| 総面積（ha） | 15,988.0 | 15,988.0 | 15,988.0 | 15,988.0 | 15,982.0 | 15,988.0 | 100.00%   | 100.00%   |

（出典：平成 30 年度版熊谷市統計書 土地・気象）

## （2）景観

深谷市は、広い範囲に緑豊かな田園景観が広がり、さらに、利根川、荒川をはじめとした水辺景観に恵まれている。冬季の強い季節風への備えである防風林や屋敷林等があり、なかでも櫛挽地区の防風林は、「ふるさと緑の景観地」に指定され、特徴的な景観を形成している。また、春には唐沢川の桜堤のほか市内各所で満開の桜がみられ、冬になると荒川に白鳥が飛来するなど、四季折々の景観がみられる。郊外部には緑豊かな屋敷林などが残されており、市内各地に分布する身近な河川・水路の水辺景観と合わせて、特色ある景観を形成している。市域南西部の鐘撞堂山や中央部の仙元山公園はランドマークとなっている。

熊谷市は、熊谷駅、籠原駅及び国宝妻沼聖天山周辺を中心として住宅地が、その外側に農村集落が広がる都市構造である。南に荒川、北に利根川が流れ、南部地域においては平地林や斜面林に加え、農耕地や点在する屋敷林などの自然豊かな景観が広がる。北部地域には、利根川流域の肥沃な大地に聖天山を中心とした門前町の歴史・文化資源と広大な田園風景の景観がみられる。また、中心市街地を流れる星川は、広場を整備し樹木も植栽され、回遊式庭園や数寄屋感覚を取り入れた星溪寮・松風庵・積翠閣を有する市指定名勝「星溪園」へと道行く人を導

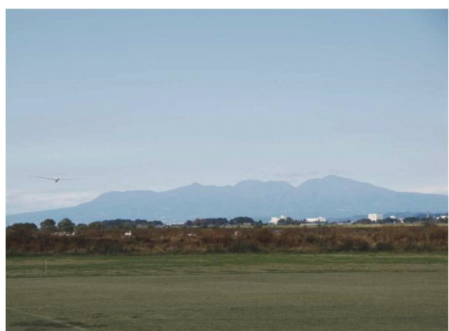
き、川岸に点在する彫刻は心を和ませ、楽しませている。さらに、平成 21 年度には、市民・事業者・行政の協働のもと、良好な景観の形成に関する方針等を定めた「熊谷市景観計画」が策定されている。



櫛挽地区の防風林(深谷市)



唐沢川の桜堤(深谷市)



広大な田園風景(熊谷市)



賑わいのある中心市街地を流れる  
星川(熊谷市)

### 3-1-4 産業

深谷市の産業分類別就業者の推移は、第一次産業及び第二次産業が減少傾向である一方で、第三次産業は増加傾向にある。農業従事者数の減少のなか、深谷ねぎやブロッコリー、トウモロコシなどの野菜の生産、チューリップ、ユリなどの花き栽培が盛んに行われており、市の主要な産業となっている。中でも、深谷ねぎ・ブロッコリー・トウモロコシは全国に知られるブランドである。商業では、深谷駅周辺はもとより、開発を進めた新市街地の形成により、商業施設の集積が進んでいる。年間商品販売額の推移では、平成 9 年（1997）をピークにやや減少気味である。卸売業や小売業の事業者数も同様の傾向である。工業では、深谷工業団地、春日丘工業団地、熊谷市にまたがる熊谷工業団地などの工業地帯が集積し、工業都市としての一面を有している。

熊谷市の産業分類別就業者の推移も深谷市と同様な傾向を示す。農業では、米麦二毛作地帯を形成し、快晴日数日本一（年 64 日）という気候条件のもと、利根川、荒川の肥沃な大地の恵みを活かして、米・麦・きゅうり・トマト・ほうれんそう・ねぎ・やまといも・にんじん・か

ぶ・ブルーベリー・大豆などを生産しており、季節における農産物の『旬』も多い。農業産出額は県内第2位となっており、小麦の生産量は県内一である。近年では、熊谷のブランド農作物を育てる動きがあり、小さな野菜「ミニくま」をはじめ、地元産の小麦による「熊谷うどん」、「妻沼ねぎ」などの生産が意欲的に進められている。商業では、年間商品販売額がさいたま市、川越市に次ぐ県内第3位の規模で、市内には、百貨店や駅ビル、駅直結型ショッピングモール、ロードサイド型ショッピングモールが存在する。工業は、狭山市、川越市、さいたま市に次ぐ規模で、製造業に属する事業所数は754あり、主な工業団地としては、熊谷工業団地、上之工業団地、御稜威ヶ原工業団地、妻沼東部工業団地、妻沼西部工業団地、船木台工業団地などがある。製造品出荷額は県内第4位である。

表 10 産業（大分類）別 15歳以上就業者数

| 年度/区分  | 深谷市   |        |        | 熊谷市   |        |        |
|--------|-------|--------|--------|-------|--------|--------|
|        | 第1次産業 | 第2次産業  | 第3次産業  | 第1次産業 | 第2次産業  | 第3次産業  |
| 平成17年度 | 7,419 | 24,228 | 41,172 | 4,435 | 27,927 | 67,359 |
| 平成22年度 | 6,166 | 21,391 | 39,533 | 3,326 | 25,599 | 62,988 |
| 平成27年度 | 5,446 | 20,364 | 40,708 | 2,870 | 24,855 | 62,516 |

（出典：深谷市 統計・オープンデータ 国勢調査。当該年度版熊谷市統計書 国勢調査）

### 3-1-5 観光

深谷市には、渋沢栄一ゆかりの施設で国の重要文化財である「日本煉瓦製造株式会社旧煉瓦製造施設」をはじめ、歴史的価値の高い文化資源や先人のゆかりの品が数多く残されている。これらの公開活用や、道の駅での野菜や花きなどの農産物の販売、交通利便性を生かした沿道サービス施設の集積、各種スポーツ・レクリエーション施設、七夕まつりや花フェスタ、深谷花火大会などのイベントの開催は、市の観光資源となっており、集客力が高まっている。

熊谷市は、熊谷ブランドとして位置付けている「雪くま」や「熊谷うどん」をはじめとする地域資源の情報発信に加え、熊谷さくら祭、熊谷うちわ祭、熊谷花火大会といった市を代表するイベントの運営や、地域伝統行事の充実につながる運営支援を実施している。熊谷さくら祭、熊谷うちわ祭、熊谷花火大会といったイベントを中心とする観光施策は大きなウエートを占めるほか、聖天山周辺においては、「歓喜院聖天堂」が国宝指定を受けたことで、通年での集客が見込めるよ



熊谷うちわまつり

うになっている。また、祭り・イベント・自然・歴史などと同様に、スポーツをも観光資源と捉えた交流人口の拡大を図っている。

表 11 観光入込客数

| 年度/区分   | 深谷市       |         | 熊谷市       |           |
|---------|-----------|---------|-----------|-----------|
|         | 観光拠点      | イベント    | 観光拠点      | イベント      |
| 平成 27 年 | 4,086,628 | 485,851 | 2,654,593 | 1,749,536 |
| 平成 28 年 | 3,397,141 | 527,735 | 3,044,624 | 1,709,820 |
| 平成 29 年 | 3,426,743 | 527,491 | 2,907,359 | 1,830,726 |
| 平成 30 年 | 3,661,484 | 443,637 | 2,930,527 | 2,021,318 |
| 令和元年    | 3,800,130 | 434,508 | 3,120,590 | 1,946,483 |

(出典：埼玉県産業労働部観光課 観光入込客統計調査結果について)

〔注〕「観光拠点」は当該市内にある観光施設の入込客数の合計、「イベント」は祭りなどの各イベントの入込客数の合計である。

## 3-2 自然環境

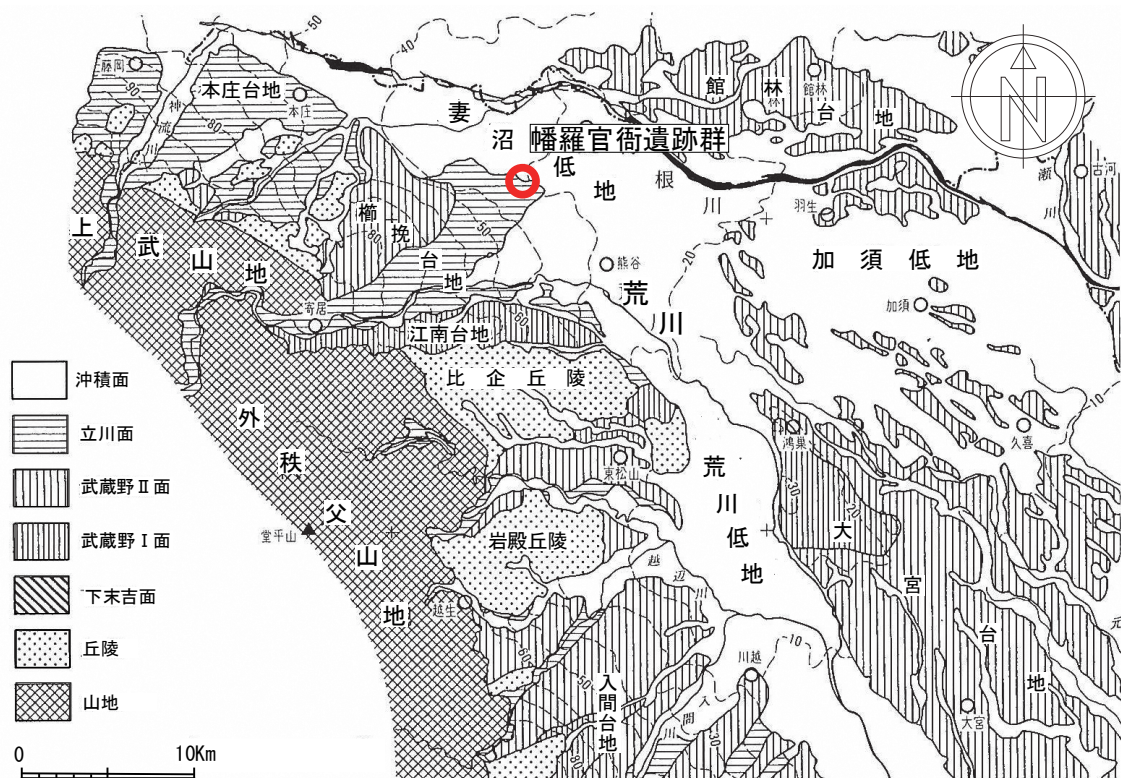
### 3-2-1 地形

深谷市・熊谷市では、平野の地形区分である丘陵・台地・低地のすべてをみることができる。

両市域に含まれる丘陵としては、松久丘陵が深谷市西部に、比企丘陵が熊谷市南部に、それぞれ一部かかっている。通常、丘陵は山地に沿うように広がり、山地と平野の中間的な位置付けとなる。両丘陵も、関東山地を形成する荒川以北の上部山地と荒川以南の外秩父山地の両山地沿いに広がる。また、これら丘陵の周辺には、河川開析などによる残丘が多くみられるという特徴がある。

丘陵と低地の間には、櫛挽台地と江南台地がある。櫛挽台地は扇状地性の台地で、西部が高く櫛挽面と呼ばれる段丘上、南東部が低く寄居面と呼ばれる段丘上に形成される。櫛挽面は武蔵野面、寄居面は立川面に対比される。江南台地は、荒川右岸に形成される扇状地性の台地である。江南台地の西部、深谷市本田付近では標高 80m を測り、台地東端では標高 45m で、荒川の上流から下流に向け低くなる。

低地は、熊谷市北部から深谷市北部にかけての広大な範囲に、妻沼低地が広がるほか、熊谷市東部には加須低地がある。妻沼低地では、本庄市から深谷市にかけて、利根川によって新規利根川扇状地が形成され、熊谷市では、荒川によって新期荒川扇状地が形成されている。これらの扇状地の下流部には、自然堤防や後背湿地からなる低地が発達している。



(出典：熊谷市『熊谷市史 通史編 上巻 原始・古代・中世』 平成 30 年 3 月)

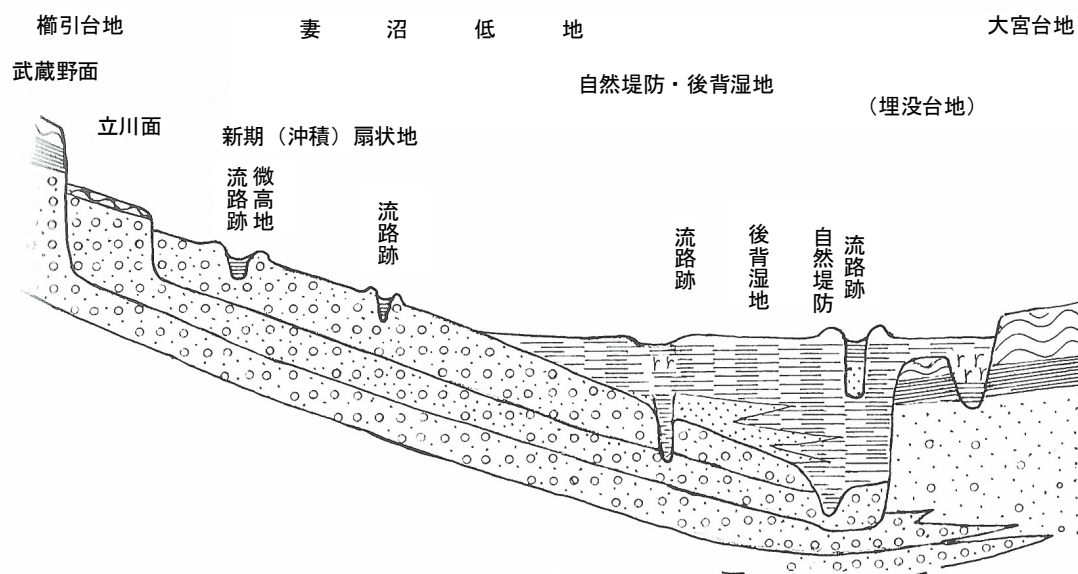
図 15 埼玉県北西部の地形

### 3-2-2 地質

深谷市西部の松久丘陵と熊谷市南部の比企丘陵は、新第三紀に形成されたもので、開析が進んだ山が連なり、複雑な地質を構成する。

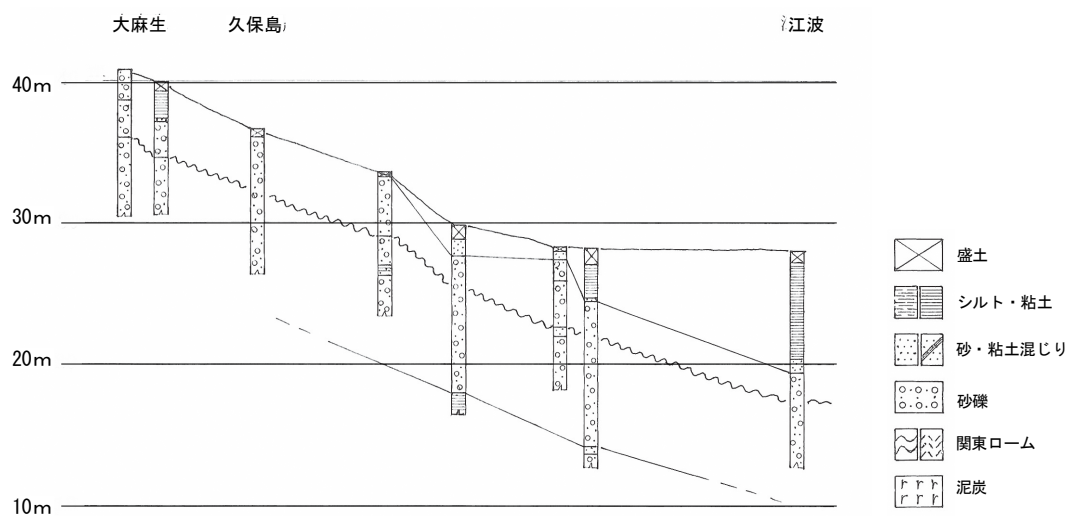
台地は、第四紀更新世のウルム氷期に形成され、櫛挽台地北部の櫛挽面は、礫・砂及び泥の櫛引礫層、南東部の寄居面は、礫・砂・泥及び粘土が堆積している。また、江南台地は、礫・砂及び泥の大里礫層が堆積している。

低地は完新世に形成されたもので、新期荒川扇状地は、深谷市植松橋の下流約 1 km を扇頂にする扇状地で、礫・砂・泥及び泥炭の低湿地堆積物や、礫及び砂の扇状地堆積物からなる。この新期荒川扇状地礫層は荒川が形成したもので、熊谷市大麻生付近での礫層は 3 ～ 6 m、同市原島付近で 5 m、同市中奈良で 6 m となり、扇状地を出て薄くなりながらも、荒川低地北部の沖積層の最下部に位置する礫層へ連続している。また、新期利根川扇状地は、本庄市から深谷市にかけての利根川の右岸に形成された扇状地で、礫・砂・泥及び泥炭の低湿地堆積物や、礫及び砂の扇状地堆積物からなる。この新期利根川扇状地礫層も、新期荒川扇状地と同様に低地に連続するものと考えられる。扇状地下流側の低地は、扇状地の礫層がその基底に分布し、その上に利根川や荒川などの河川による砂層や泥層が堆積している。



(出典：熊谷市『熊谷市史 資料編 1 考古』 平成 27 年 3 月)

図 16 熊谷市とその周辺の地質模式断面図



(出典：熊谷市『熊谷市史 資料編 1 考古』 平成 27 年 3 月)

図 17 熊谷市域南北地下地質断面図



完新世

|           |                                         |
|-----------|-----------------------------------------|
| r         |                                         |
| a4        | 礫・砂及び泥<br>Gravel, sand and mud          |
| a3        | 礫・砂・泥及び泥炭<br>Gravel, sand, mud and peat |
| a2        | 砂<br>Sand                               |
| a1        | 礫及び砂<br>Gravel and sand                 |
| a0        | 礫・砂及び泥<br>Gravel, sand and mud          |
| F, Fk, Fs | 礫・砂及び泥<br>Gravel, sand and mud          |

更新世（後期）

|         |                                                                                             |
|---------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| T, T1-4 | 礫・砂・泥及び粘土<br>Gravel, sand, mud and clay                                                     |
| Mm      | 安山岩岩塊・礫・砂及び泥<br>Andesite block, gravel, sand and mud                                        |
| M, M1-2 | 礫・砂・及び泥<br>Gravel, sand and mud                                                             |
| Od      | 砂<br>Sand                                                                                   |
| O, O1-3 | 礫・砂・及び泥<br>Gravel, sand and mud                                                             |
| S, S1-4 | 礫・砂・及び泥<br>Gravel, sand and mud                                                             |
| Ha      | 輝石安山岩及び角閃石ディサイトの火砕堆積物<br>Volcaniclastic deposits of pyroxene andesite and hornblende dacite |

（出典：地質調査総合センター「20 万分の 1 地質図幅」）

[https://www.gsj.jp/data/200KGM/JPG/GSJ\\_MAP\\_G200\\_NJ5430\\_1991\\_200dpi.jpg](https://www.gsj.jp/data/200KGM/JPG/GSJ_MAP_G200_NJ5430_1991_200dpi.jpg)

図 18 地質図

### 3-2-3 気象

ここでは、幡羅官衙遺跡群から直線距離で約 6.7 km に所在する熊谷地方気象台の観測データを表示する。熊谷市は夏の暑さが全国的にも有名だが、夏と冬の寒暖の差が大きく、深谷市も同様である。また、夏から秋にかけては雷が多く、雷雨が夏の降水量を多くする一因となっている。埼玉県北部は内陸性気候の特徴をもち、冬には「赤城おろし」と称するこの地域特有の北西からの強い季節風が吹き、非常に乾燥する。

年間平均降水量は 1286.3mm であり、最多降雨月は 9 月である。また、年間平均気温は 15.0℃ で平均最高気温の月は 8 月である。平均風速は 2.4m/s で、通年では北西の風向きが多く、12 月～3 月期の平均風速は 2.87 m/s である。

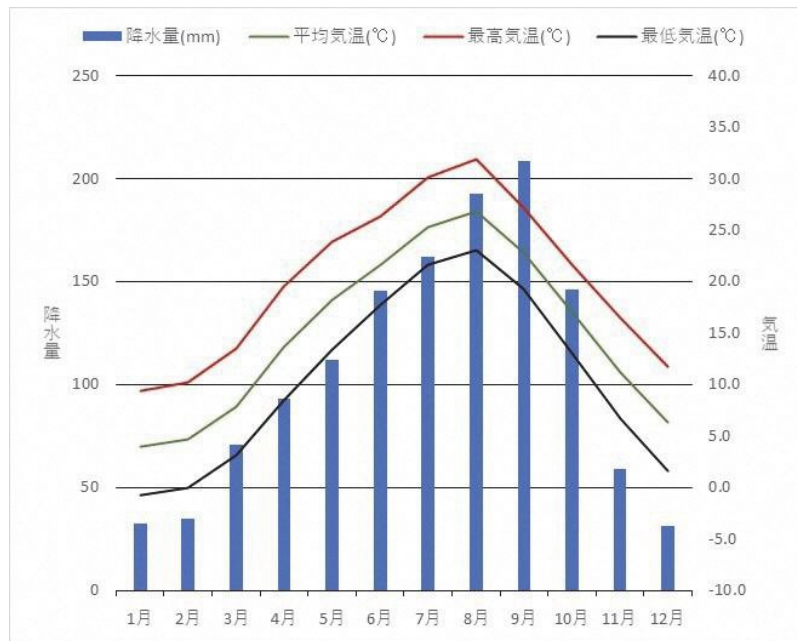


図 19 気温と降水量（統計期間：1981-2010 年）

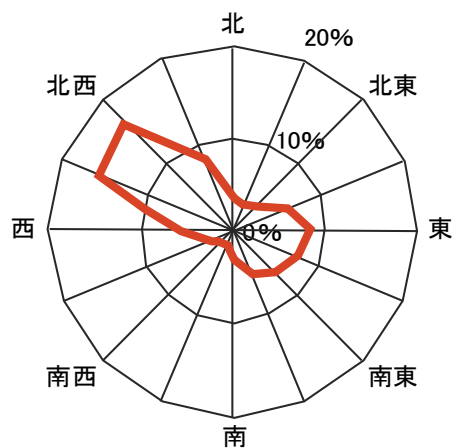


図 20 風配図（統計期間：1981-2010 年）

### 3-2-4 災害

図 21～24 は、深谷市や熊谷市が作成した「洪水・内水ハザードマップ」による浸水域と「地震ハザードマップ」による危険度を示している。

深谷市域では、史跡北側の妻沼低地では想定浸水の深さがおおむね 0.5m 未満から 1.0m 未満である。台地上でも史跡の東側は 0.5m 未満の浸水区域に入っているが、幡羅官衙遺跡群の正倉院域などは安全な範囲となっている。また、深谷市地震ハザードマップでは、正倉院域などが位置する北西の一部が危険度 1（全壊率 3% 未満）を示し、安定した地盤と考えられる。

また、熊谷市域では、小山川・福川・石田川・蛇川の洪水により、妻沼低地では想定浸水の深さがおおむね 0.5m 未満～1.0m 未満であるが、台地上の西別府祭祀遺跡や西別府廃寺の付近では 0.5m 未満となる。

熊谷市地震ハザードマップでは、西別府祭祀遺跡や西別府廃寺の一带は、危険度 1（全壊率 3 %未満）を示し、安定した地盤と考えられる。

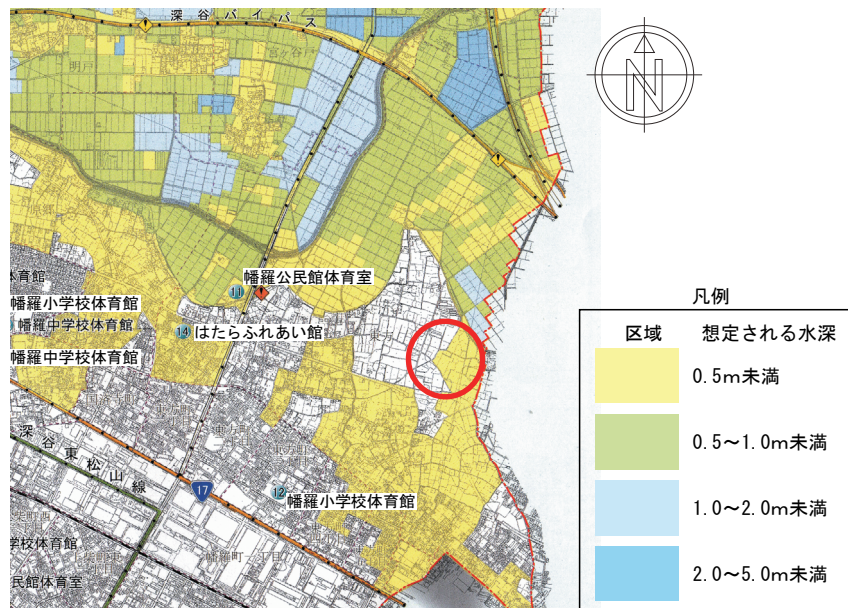


図 21 深谷市洪水・内水ハザードマップ（平成 26 年 3 月）

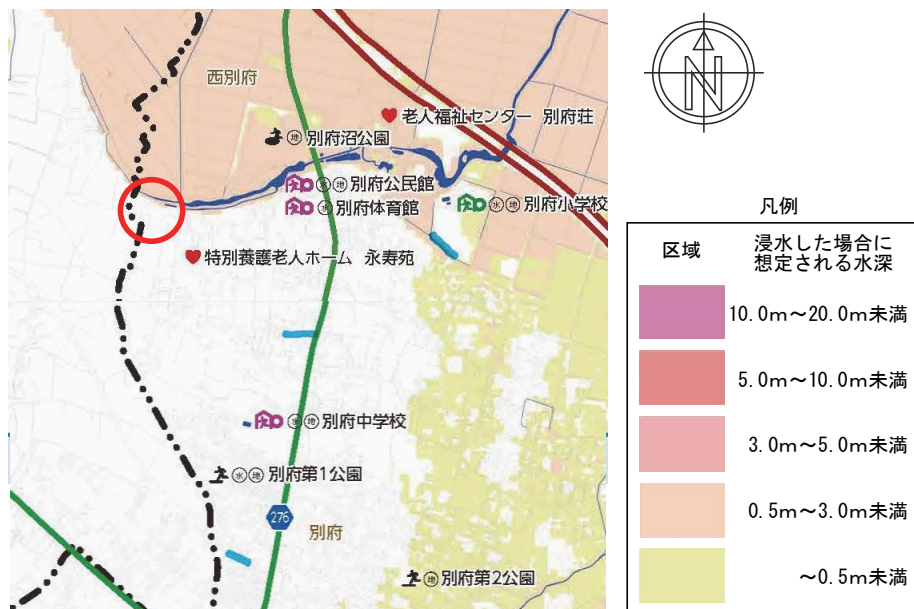


図 22 熊谷市洪水ハザードマップ（令和 2 年 12 月）

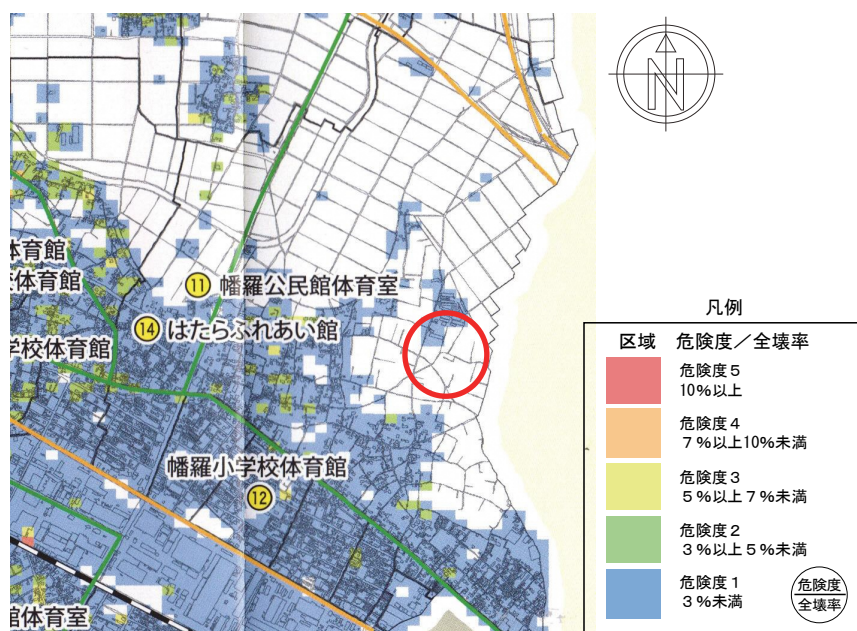


図 23 深谷市地震ハザードマップ（平成 26 年 3 月）

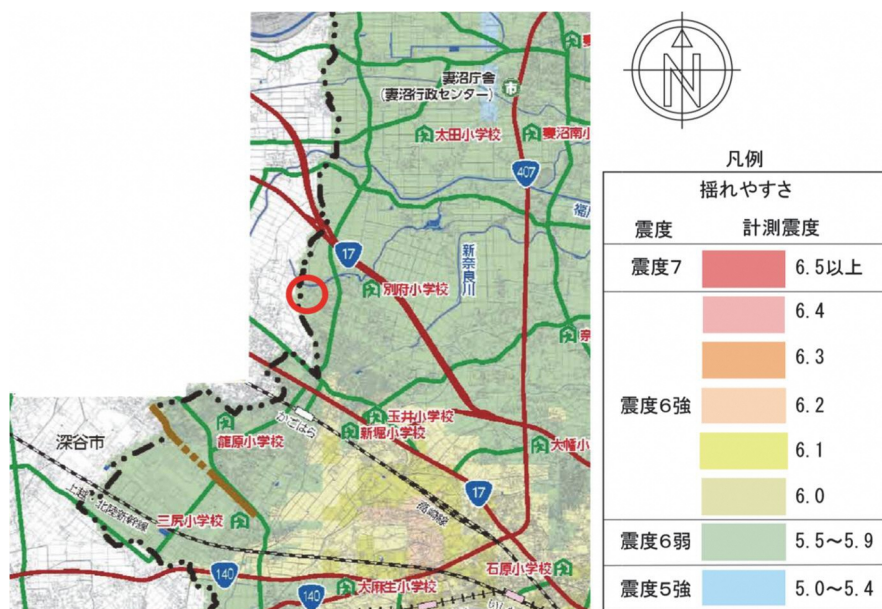


図 24 熊谷市揺れやすさマップ（令和 2 年 12 月）

### 3-2-5 植生

幡羅官衙遺跡群を含む地域は、埼玉県気候区分では温暖帯に属する。現状では、市街地や工場地帯を除くと、櫛挽台地や新期荒川扇状地の大半は畑地雑草群落で、低地では水田雑草群落、低地の微高地上には畑地雑草群落が点在している。

また、利根川や荒川沿いには、ヨシクラスやオギ群落などの河辺植生がみられる。

本地域では土地開発が進行し、植生のまとまりは少ない。地域的特色を示す植生が認められるところとしては、深谷市域では、「鐘撞堂山ふるさとの森」「櫛挽地区の防風林」「仙元山」などがあり、熊谷市域では、史跡指定地に隣接する「別府沼」のほか、「観音山」、「野鳥の森とその周辺（荒川河川敷）」、「江南台地の平地林」などがある。

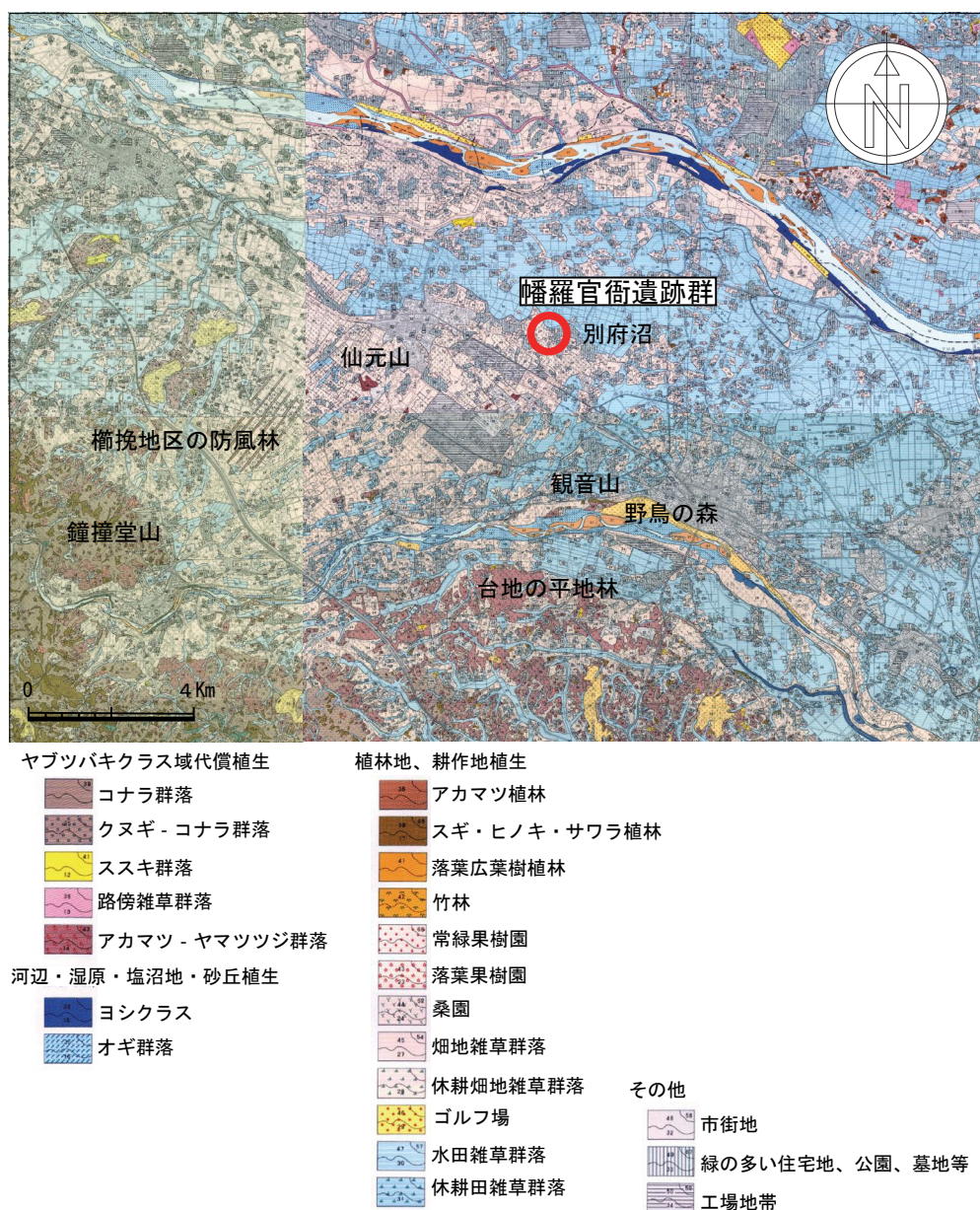
史跡指定地一帯には、畑地に成立する雑草群落のみられ、シロザ、ツユクサ、スベリヒユ等の1年生の植物を主な構成種とする。史跡指定地北東端に位置する湯殿神社の森は、クヌギ・コナラ群落である。

この群落はヤブツバキクラス域において、本州、四国の太平洋側の台地や丘陵に成立する落葉広葉樹の二次林で、コナラ、クヌギ、クリなどが優占し、ミズキ、エゴノキ、ウワミズザクラなどが混生する。これらは、東北南部、関東、中部、四国の主として台地に分布し、黒ボク土壌でよく発達する。

表 12 地域の特徴を残す植生

| 深谷市域 |            |                                                                                          |
|------|------------|------------------------------------------------------------------------------------------|
|      | 鐘撞堂山ふるさとの森 | 落葉広葉樹の二次林で、高木層はコナラが優占し、クリ、ミズナラが混生する。主な植物はヤマツツジ、クヌギ、ヤナザクラ、カスミザクラ、コナラ、クリ、スギ、ヒノキ、アカマツなどがある。 |
|      | 櫛挽地区の防風林   | 「櫛挽ふるさと緑の景観地」の防風林は、ナラ、マツ、カシ、クヌギなどからなる。                                                   |
|      | 仙元山        | 櫛挽台地の北部に位置する標高98.0mの残丘で、乾性立地に成立する常緑針葉樹の二次林でアカマツが優占する。                                    |

| 熊谷市域 |                      |                                                                                      |
|------|----------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
|      | 別府沼                  | ミゾコウジュ、ヒメシロアサザ、ヒシ、ミズオアイ、ミズオオバコ、ミクリなど、多くの湿生植物が繁殖し、これまでに14種の絶滅危惧種が確認されている。             |
|      | 観音山                  | 荒川の浸食により残った丘陵で、アカマツやクヌギ、コナラ、エゴノキ、ヤマツツジなどからなる樹林の林床には、貴重な低地性のニッコウキスゲやカタクリの小群落がある。      |
|      | 野鳥の森とその周辺<br>(荒川河川敷) | 広瀬、大麻生地区に広がる河川敷は扇状地特有の形をなし、全国でも有数のカワラナデシコの群落があり、このほかカワラサイコ、テリハノイバラなどの河川特有の植物が生育している。 |
|      | 江南台地の平地林             | 市域南部の台地には、アカマツ、クヌギ、コナラやスギ、ヒノキ植林による、斜面林や平地林が形成されている。                                  |



出典：生物多様性センター「自然環境調査 Web-GIS 五万分の一現況植生図」（寄居、熊谷、妻沼、三ヶ尻を合成）

図 25 植生図

### 3-2-6 動物相

深谷市及び熊谷市は、豊かな自然環境を有し、環境に適した多種多様な動物をみることができる。しかし、近年は、開発行為に伴う樹林地の伐採や湧水の枯渇、宅地開発に伴う屋敷林の減少などに伴い、生息場所を失い個体数が減少している。

本史跡周辺では、モグラやタヌキ、イタチ、ノウサギなどの哺乳類が観察されている。鳥類ではキジが生息しているほか、史跡北に流れる福川や東に位置する別府沼には、カイツブリ、コサギ、アオサギ、カワセミなどの水辺の鳥が観察される。また、冬場は、多くのカモ類の越

---

冬地となり、特にオオバンの越冬地としては県下で有数といわれている。別府沼では、アズマヒキガエルなど多くの両生類も観察されており、近年オオクチバスなどの外来魚も確認されている。

また、両市域を含む周辺地域では絶滅が危惧される貴重種の動物も多種生息していることが確認されている。絶滅危惧種を含む貴重種としては、マガン・ヒクイナ・オオバンなど鳥類 33 種、ヤマカガシなどの爬虫類 2 種、ツチガエルなど両生類 2 種、ミヤマシジミなど昆虫類 6 種、ムサシトミヨ・キバチ・メダカなどの魚類 7 種が確認されている。

### 3-3 歴史的環境

#### 3-3-1 古墳時代以前の様相

幡羅郡域となる深谷市北東部・熊谷市北西部の櫛挽台地上では、後期旧石器時代の遺跡もあり、深谷市幡羅官衙遺跡ではナイフ形石器、熊谷市籠原裏遺跡では尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡は、草創期から前期までは旧石器時代と同様に少ないが、中期でも後半になると数が増加し、遺跡の規模も大きくなる。そして、後・晩期以降になると、櫛挽台地から妻沼低地に主な居住域が移る。深谷市上敷免遺跡では、遺物包含層から、在地の後・晩期の土器に混じり、東海系条痕文土器や遠賀川系の壺が出土するなど、西方地域との交流が認められる。

弥生時代の遺跡では、上敷免遺跡や熊谷市横間栗遺跡で前期末から中期前半までの再葬墓、深谷市宮ヶ谷戸遺跡などで若干時期が下る竪穴建物が確認されている。

古墳時代の遺跡としては、熊谷市一本木前遺跡など、妻沼低地上に立地する前期の集落跡の調査例が増加している。中期は遺跡数が減少するが、後期になると非常に多くなり、妻沼低地の自然堤防上に大規模な集落が営まれる。この時期には群集墳が造られ、幡羅官衙遺跡群周辺の櫛挽台地縁辺には、径 20～30m 規模の円墳を中心とする深谷市木の本古墳群や熊谷市別府古墳群が立地し、墓域であったと考えられる。7 世紀頃には、上敷免遺跡などの大集落が縮小傾向を示し、代わって幡羅官衙遺跡群に比較的近い位置にある宮ヶ谷戸遺跡や清水上遺跡など集落の規模が拡大する傾向がみられる。



深谷市木の本古墳群

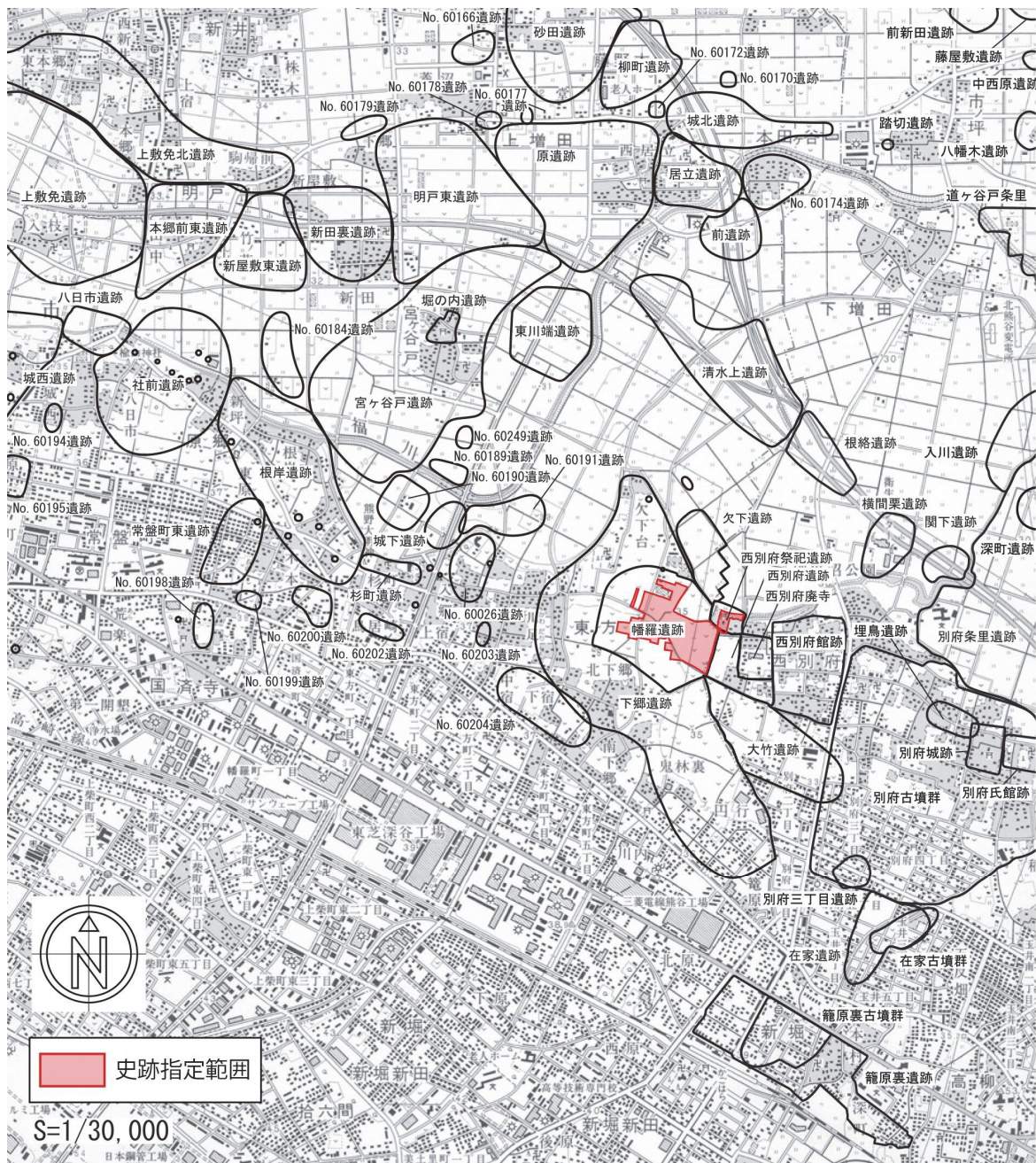


図 26 幡羅官衙遺跡群周辺の古墳時代後期の遺跡

### 3-3-2 古代幡羅郡の様相

#### (1) 古代幡羅郡の行政区分

幡羅郡は武蔵国北部に位置し、西に榛沢郡、東に埼玉郡、南に男衾郡及び大里郡が隣接する。また、利根川を挟んだ北には、上野国の新田郡が隣接する。『倭名類聚抄』によると、幡羅郡は上秦・下秦・広沢・荏原・幡羅・那珂・霜見・余戸の8郷からなる中郡にあたる。各郷の比定地には諸説あるが、幡羅郷は現在の原郷及び周辺、那珂郷はその東に接し現在の熊谷市別府地区辺りと推定される。幡羅郡家は、郡名郷である幡羅郷の東端部、那珂郷との境付近に置かれていた可能性がある。

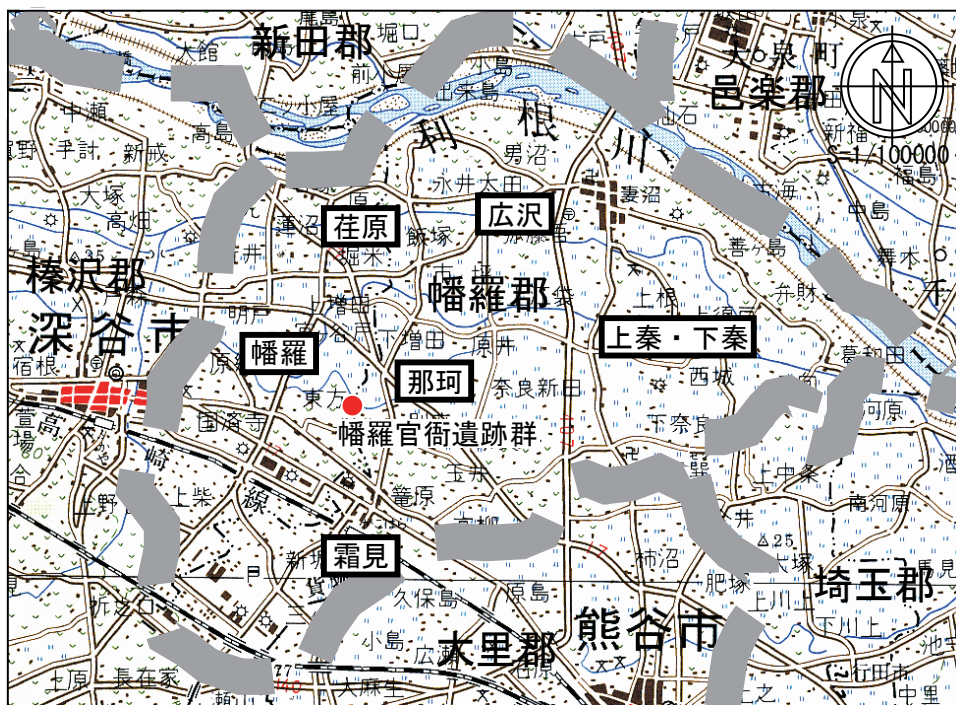


図 27 幡羅郡域と郷推定図

## (2) 主要遺跡からみた古代の幡羅郡

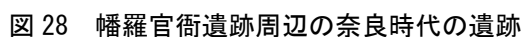
史跡隣接地区の台地上には、幡羅郡家と並立する寺院である熊谷市西別府廃寺、大規模集落の深谷市下郷遺跡・熊谷市大竹遺跡が立地する。いずれも郡家と消長をともにし、郡家に深く関わる遺跡である。

史跡周辺地域には、史跡北方の低地に熊谷市別府条里遺跡がある。その北西に位置する、7世紀の集落であった深谷市清水上遺跡は、集落廃絶後に水田として開発されていることから、古代の水田域は、別府条里遺跡の範囲よりもさらに広がりをもっていたと思われる。また、その周辺の自然堤防上には、多くの集落が分布しており、深谷市東川端遺跡では、粘土採掘坑や土師器焼成遺構が確認されている。幡羅官衙遺跡群を中心に、7世紀後半～8世紀前葉にかけての土師器暗文坏が多く出土しており、ここでは、こうした器種を中心に土師器生産が行われ多量に消費されていた可能性がある。

史跡から約2.5km北西にある深谷市新屋敷東遺跡では、大型掘立柱倉庫が確認されており、正倉別院の可能性もある。また、南東方約1.3kmにある熊谷市在家遺跡では、掘立柱建物23棟や竪穴建物15棟のほか、敷地をL字状に囲繞する区画溝1条などが検出された。この区画溝は一辺110mにも及び、区画内からは桁行5間以上の大型の掘立柱建物跡が確認されている。また、円面硯や転用硯、須恵器高盤、朱墨のものを含む「林主」「播」「西」の墨書土器などの遺物も出土しており、郡家の出先機関や有力者の居宅といった性格が考えられる。

南に約2kmにある熊谷市籠原裏古墳群は、幡羅官衙遺跡群の成立とほぼ同じ時期に築造が始

このように、本史跡の隣接地区や周辺地域には、古代幡羅郡の特徴を示す官衙関連遺跡や集落遺跡、条里遺跡、古墳群といった遺跡があり、また、白髭神社・田中神社・楡山神社・奈良神社などの式内社もあり、これらは幡羅官衙遺跡群の歴史的意義を深く知り、より有効に活用する上でも重要である。



### (3) 幡羅郡の古代交通路

幡羅郡の西端に位置する深谷市八日市遺跡では道路跡が確認されており、郡の南東端には荒川の旧河道があったと思われる。東山道武蔵路の位置は確定していないが、諸説のいずれでも幡羅官衙遺跡群に近接し幡羅郡を南北に通る路線が推定されているように、当郡は上野国から武蔵国への玄関口に位置していた。

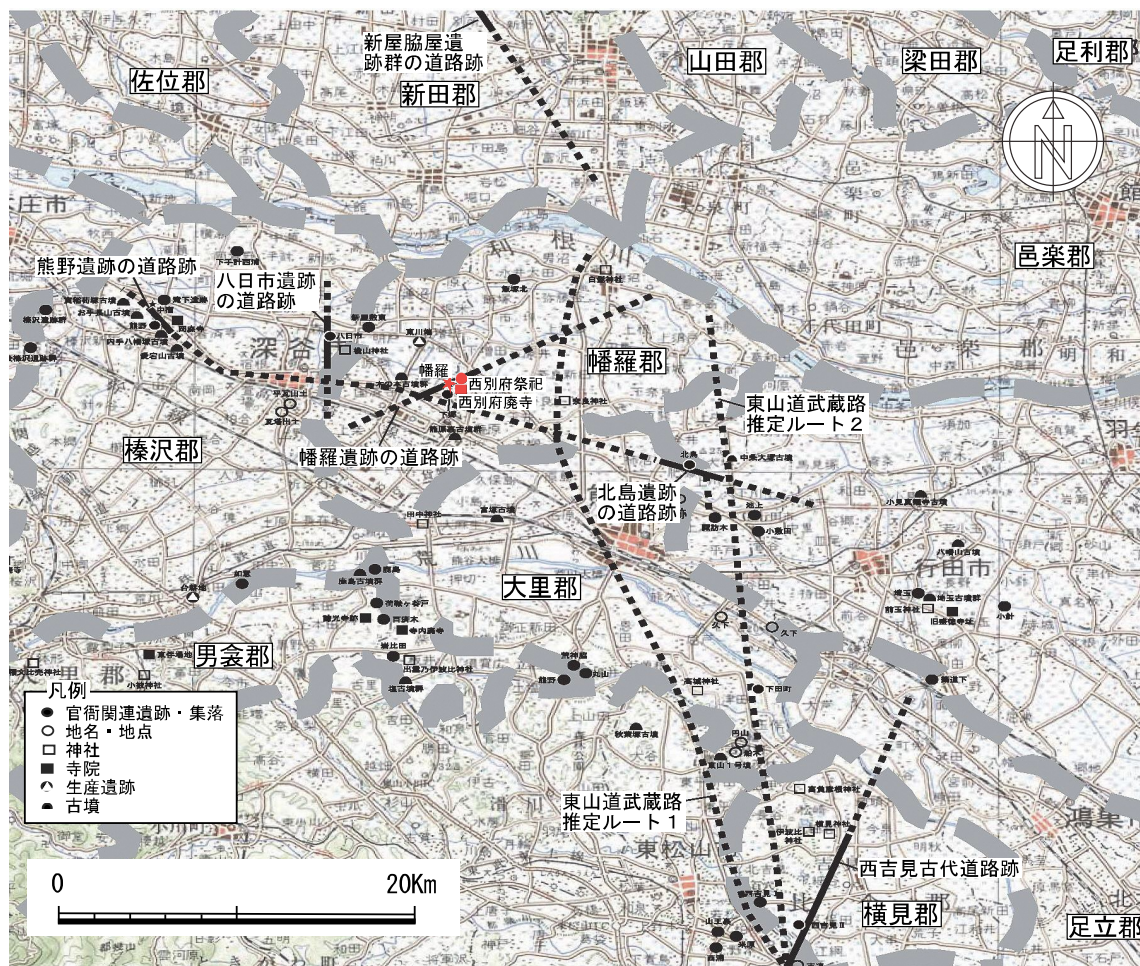


図 29 幡羅官衙遺跡群周辺の古代交通網

熊谷市北島遺跡では東西方向の道路跡、深谷市熊野遺跡では旧中山道とほぼ同じ方位の道路跡が確認されている。これは、東山道武蔵路と交差し郡家間を東西に結ぶ道路とみられ、旧中山道はこの古代の郡間道路を前身として整備された可能性がある。旧中山道は幡羅郡家の南を東西に走っており、そこから幡羅郡家に向かって延びる道路跡が2本確認されている。

また、榛沢郡の正倉院である中宿遺跡の北側崖下にある深谷市滝下遺跡では、古代の運河跡がみついている。幡羅郡家でも同様に正倉院の北側崖下の低地に運河が設けられていたと考えられ、史跡外の西別府祭祀遺跡ではその掘り込みとみられる遺構が確認されている。

幡羅郡家周辺では東山道武蔵路や郡間道路のみならず、その支路も多数設けられており、河川交通と併せて古代交通網が形成されていたと考えられる。

---

#### (4) 文献史料にみえる古代の幡羅郡

古代幡羅郡に関する史料には以下の4例があり、いずれも9世紀のものである。

##### 多賀城跡出土木簡

- ・ 武蔵国播羅郡米五斗 部領使□□刑部古□□<sup>[乙正カ]</sup>
- ・ 大同四年十□月[ ]

大同4年(809)に幡羅郡から多賀城に送られた米の付札である。この頃は、宝亀5年(774)に起きた海道蝦夷による桃生城襲撃に始まる38年戦争の末期にあたる。幡羅郡から送られた米は軍糧であり、幡羅郡は対蝦夷戦争の兵站を担う郡の1つであったと考えられる。また、「刑部古□□<sup>[乙正カ]</sup>」という人名は、古墳時代に、この地域に御名代が置かれていた可能性を示唆するものと思われる。

##### 『類聚国史』災異 地震 弘仁九年(818)条

「弘仁九年七月 相模・武蔵・下総・常陸・上野・下野等国地震、山崩谷埋数里、圧死百姓不可勝計 八月庚午 (中略) 如聞、上野国等境、地震為災、水潦相仍、人物凋損」

幡羅郡の名が直接記される史料ではないが、弘仁9年(818)の北武蔵を中心とする大地震の記事であり、幡羅郡も大きな被害を受けたと考えられる。幡羅郡及び周辺の妻沼低地の自然堤防上にある集落では、噴砂や地割れの痕跡が極めて高い頻度で確認される。幡羅郡周辺では、震度6強以上の激震が襲ったと推定される。台地上の幡羅官衙遺跡では、明瞭な地震痕跡は確認されていないものの、おそらく同程度の揺れがあったとみられ、郡家もまた甚大な被害を被ったであろう。朝廷はこれに対して、「其有因震潦、居業蕩然者、使等与所在官司同斟酌、免今年租調、并不論民夷、以正税賑恤、助修屋宇、使免飢露」(『類聚国史』八月十九日)と指示している。したがって、幡羅郡家は、郡内の復興の拠点としての役目も果たしたと思われる。

##### 『続日本後紀』承和元年(834)二月十七日条

「承和元年二月十七日、武蔵国播羅郡荒廢田百廿三町奉充冷泉院」

律令制の衰退により、9世紀前半には幡羅郡内に広大な荒廢田が生まれていた状況や、その再開発の動きがみられたことを示す。貴族にそうした田地を寄進することによって、郡司層が中央権力との結びつきを強める意図もあったであろう。同様の記事は幡羅郡に限らずしばしばみられる。荒廢田が生まれる背景には、農民の逃亡などがあったと思われる。そして、こうした土地を再開発することによって、新興勢力の台頭など地域社会の再編も生じたと考えられる。

---

この頃、近隣では、熊谷市飯塚北遺跡、同市北島遺跡、同市諏訪木遺跡において大規模な圍繞施設を伴う区画が出現しており、幡羅遺跡にみられる9世紀後半以降の二重溝と土塁により圍繞された区画などの性格を考える上でも参考にすべきものである。そうした社会の流れを引き起こした一つの契機として、『類聚国史』に記されたような、大災害も挙げることができるかも知れない。

#### 『日本文徳天皇実録』嘉祥三年（850）五月十九日条

「詔。以武蔵国奈良神列於官社。先是。彼国奏請。檢古記。慶雲二年（705）此神放光如火熾。然其後。陸奥夷虜反乱。国発控弦。赴救陸奥。軍士載此神靈。奉以撃之。所向無前。老弱在行。免於死傷。和銅四年（711）神社之中。忽有湧泉。自然奔出。溉田六百余町。民有疫癘。禱而癒。人命所繫不可不崇。従之。」

式内社の奈良神社における湧水などに関する記事である。幡羅郡のおよそ南半は櫛挽台地、北半は妻沼低地であり、その境界付近では台地の先端で湧水が所々に見られる。西別府祭祀遺跡で湧いていた泉も同様である。奈良神社における湧水も、こうした一例と思われる。湧水があったとされる和銅4年（711）は、幡羅郡家が整備されて間もない頃にあたり、8世紀初頭頃には、官衙の整備だけでなく、水田開発も進められていったことを窺わせる。また、慶雲2年（705）の蝦夷征討に関わる奈良神社神霊の記載は、当地が蝦夷に対する軍事拠点でもあったことを示唆するものである。なお、現存する奈良神社は、史跡から約3km東に所在するが、もともとは西別府祭祀遺跡の地にあった可能性を指摘する説もある。

#### （5）古代幡羅郡の自然災害

前述したように、『類聚国史』弘仁九年（818）条の北武蔵を中心とする震災記事は、幡羅郡にも大きな災害をもたらしたことをうかがわせるが、この震災記事を含め、7世紀～11世紀における幡羅官衙遺跡群の存続時期に、武蔵国に被害をもたらしたと考えられる自然災害を記した史料には表13のような例がある。

表 13 古代の埼玉県下に影響を及ぼしたとみられる自然災害記事一覧

| 西暦   | 和暦     | 区分  | 事象                                                                        |
|------|--------|-----|---------------------------------------------------------------------------|
| 714  | 和銅 7 年 | 気象  | 武蔵・下野など 6 か国に大風（続日本紀、同年 10 月 1 日条）。                                       |
| 818  | 弘仁 9 年 | 地震  | 相模・武蔵・下総・常陸・上野・下野国に地震、百姓多数圧死（類聚国史）。                                       |
| 838  | 承和 5 年 | 降灰  | 5 日夜より伊豆上神津島噴火、7 月～9 月武蔵・上総国など 16 か国に降灰（続日本後紀、同年 9 月 29 日・7 年 9 月 23 日条）。 |
| 858  | 天安 2 年 | 水澇  | この年武蔵国水澇。下野国大嵐（日本三代実録、3 年 4 月 7 日条）。                                      |
| 865  | 貞観 7 年 | 気象  | 武蔵国早霜の被害（日本三代実録、同年 12 月 9 日条）。                                            |
| 866  | 貞観 8 年 | 風水害 | 武蔵国で前年風水害、この年旱害（日本三代実録、同年 6 月 13 日条）。                                     |
| 878  | 元慶 2 年 | 地震  | 夜、関東諸国に大地震。その後 5、6 日震動。武蔵・相模被害大（日本三代実録）。                                  |
| 1092 | 寛治 6 年 | 甚雨  | 坂東諸国に甚雨（後二条師通紀、同年 8 月 15 日条）。                                             |
| 1108 | 天仁元年   | 降灰  | 浅間山噴火。上野国大被害（中右記）。                                                        |

（『新編埼玉県史』別冊 3 付表気象略年表より、関連のあるものを記載）

### 3-3-3 中世以降の様相

#### （1）中世

平安時代末期以降の深谷市域では、畠山氏や岡部氏、人見氏などの武士団の居館が各地に出現する。畠山重忠墓及び岡部六弥太墓、人見氏館跡は県指定史跡になっている。熊谷市域でも、源平合戦で活躍した熊谷直実、斎藤別当実盛のほか、成田四家（成田氏・別府氏・奈良氏・玉井氏）、中条氏など多くの武士団が台頭し、市内各地に居館跡及び伝承地がある。これらの多くは、県ないし市の指定史跡になっている。中でも別府氏中でも別府氏は、本史跡周辺を本拠

---

としており注目される。

また、この頃の信仰を示す板石塔婆には、国内最古の紀年銘を持つ「嘉禄三年（1227）銘板石塔婆」をはじめ、市内には多くの板石塔婆が残る。

14 世紀後半、関東管領山内上杉憲顕は、北関東の新田氏の勢力などを抑えるため、六男の憲英を派遣し、庁鼻和城に居を構え、深谷（庁鼻和）上杉氏の始祖となる。5 代目房憲の時、古河公方と関東管領との勢力争いが激しくなり、要害堅固な深谷城を築く。この争いには、この頃、熊谷市域で台頭する成田氏（のちに行田市の忍城に移る）も加わる。また、深谷城から東へ約 3 km の台地先端部には東方城跡が所在し、土塁の一部が現存し、深谷市指定史跡となっている。東方城跡は、成立年代は不明だが、幡羅官衙遺跡や下郷遺跡に近接し、下郷遺跡では、深谷上杉氏が入る 14 世紀後半頃以降の区画溝や土坑などが確認されている。



上杉憲英墓(深谷市国済寺)

## (2) 近世

豊臣秀吉の小田原攻めにより、北条方であった深谷上杉氏や成田氏は秀吉の軍門に下り、深谷市の深谷城や行田市の忍城は開城した。その後、江戸に徳川家康が入り、深谷城と東方城はそれぞれ 1 万石の大名が配置されたものの、江戸時代初期には両城とも廃城となり、忍城は徳川氏の譜代大名などの居城となる。



旧深谷宿常夜燈(深谷市田所町)

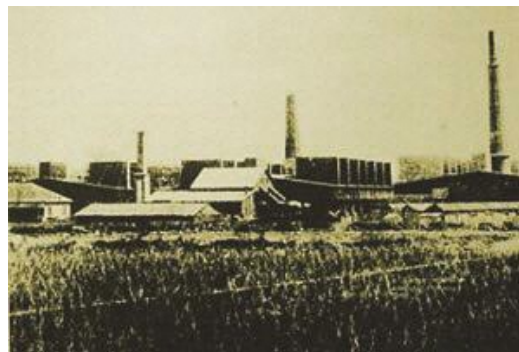
その後の幡羅郡地域は、中山道の深谷宿・熊谷宿を中心に栄え、小林一茶や葛飾北斎、溪斎英泉、安藤広重など、文化人の残した作品から深谷宿・熊谷宿の当時の賑わいの様子がわかる。また、荒川・利根川には河岸場がおかれ、交通の要所として繁栄した。加えて、江戸時代の中頃からは養蚕や酒造業、造瓦業などが発展した。

## (3) 近代・現代

幕末から明治にかけては、深谷市北部の村々から桃井可堂、尾高惇忠、渋沢栄一といった憂国の志士が輩出された。これは中瀬河岸という情報集積地が近くにあったことで、文化水準が高かったことも関係している。渋沢栄一は、明治維新後は新政府で官僚となるが、後に実業界

に入り、近代日本経済の父と呼ばれる活躍をした。

明治 20 年（1887）には、栄一が中心となり日本初の機械式煉瓦製造工場である日本煉瓦製造株式会社が設立された。深谷市上敷免の工場で作られた煉瓦は、東京駅、迎賓館、法務省旧本館など、明治・大正期の多くの西洋建築物に用いられている。また、深谷では、江戸時代以来、酒造業や造瓦業が盛んであるとともに、富国館や開国館といった大規模な製糸工場が造られ、蚕都の様相を呈した。



日本煉瓦製造株式会社の遠景  
(明治 22 年ごろ)

熊谷市域でも様々な分野の先覚者が輩出されている。竹井澹如は、埼玉県議会の初代議長を務めるなど政治面での活躍に加え、産業・教育・土木においても熊谷市の発展に大きな功績を遺した。荻野吟子は、日本で最初の公認女性医師となり、女性の地位向上に大きく貢献し、その波乱万丈な人生は小説などで広く紹介されている。農業分野では、権田愛三が出身地である東別府の地で、麦の栽培方法の改良に尽力し、収穫量を増大させた功績から「麦王」と呼ばれている。蚕糸業の先覚者である鯨井勘衛は、大蚕室「元素楼」をつくり、清涼育と呼ばれる画期的な蚕児飼育法を広めた。美術分野では、女流南画家の大家である奥原清湖、中央画壇で活躍した森田恒友、県下初の洋画団体を設立した大久保喜一など優れた芸術家を輩出している。

現在に至る行政区分の変遷をみていくと、江戸時代には武蔵国に属し、幕府直轄領や藩領であった史跡周辺は、東方村、西別府村と称した。徳川幕府が慶応 3 年（1867）に大政奉還後、明治 4 年（1871）に廃藩置県がなされると、入間県の一部となり、明治 6 年（1873）には入間県と群馬県が合併し熊谷県の一部となった。その後、明治 9 年（1876）に熊谷県が廃止され、熊谷県の武蔵国に属した部分が埼玉県に合併し埼玉県の一部となった。明治 22 年（1889）の町制施行では、幡羅郡幡羅村及び別府村に属し、明治 29 年（1896）に大里郡、幡羅郡、榛沢郡、男衾部の区域をもって、大里郡に属することとなった。

幡羅村は、昭和 30 年（1955）に深谷町、明戸村、大寄村、藤沢村と合併し深谷市となった。その後、深谷市は、昭和 48 年（1973）に大里郡豊里村を編入し、平成 18 年（2006）には、深谷市、大里郡岡部町、大里郡川本町、大里郡花園町が合併し、現在の深谷市となった。

別府村は、昭和 29 年（1954）に奈良村、三尻村とともに熊谷市に編入となった。昭和 30 年（1955）には、大里郡吉岡村、北埼玉郡太井村のうちの大字太井、行田市に編入されていた北埼玉郡星宮村のうちの池上・下川上が分離し熊谷市に編入された。その後、平成 17 年

（2005）には、熊谷市、大里郡妻沼町、大里郡大里村が合併し、平成 19 年（2007）には大里郡江南町も編入され、現在の熊谷市となった。